The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	情動的感動詞考
Author(s)	森山, 卓郎
Citation	語文. 1996, 65, p. 51-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68890
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

情動的感動詞考

森山卓郎

〔キーワード〕感動詞　応答　情動　遭遇　内発

〔要旨〕
感動詞を大きく分類し、情動的反応を表す感動詞の意味用法を、「泉」の比喩を使ったモデルで整理する。そして、「ああ」のような内から沸き上がってくる感情を表す内発系感動詞と、なにかに遭遇した反応である、「おや」「おっと」「わあ、きゃあ」などの遭遇系の情動とを分類する。後者は、未知との遭遇、予想からの逸脱、手続き実行上のハプニング、情意変動の大きさなど、さまざまな心的操作・情動の違いによる使い分けが整理できる。（1995/8/31脱稿）

一　はじめに

感動詞は、単独で独立的成分となるという点で、特異な語群だと言える。そこで、従来、感動詞をめぐっては、その構文論的位置付けと、品詞としての感動詞の定義と分類といったことが中心に議論されてきた。こうした議論の経緯については、山口（1984）において詳しく検討されている。[1] 感動詞の特性として問題となることは、大きくは二点に集約されるとみてよい。一つは、それだけで「意味が切れ」ているということ、いわば感動詞の「独立性」という特質である。[2] そして、もう一つは、実質内容的な意味はなく、もっぱら話し手の主観的な把握を表現するといった意味をもつということ、つまり、いわゆる「辞」性という特質である。

感動詞が構文論的に独立性をもっているということは、その意味的性質と無関係ではない。感動詞は実時間的な話し手の認識上の反応や伝達上の働きかけなどを表すのであって、様々な文脈状況に即応して使用されなければならず、その点で、機能的な自律性が必要だと考えることができる。

では、我々は、どういう状況においてどういう感動詞を使っていると言えるのであろうか。実は、この問いに答えることはさほど易しいわけではない。そもそも、言語の論理的側面に関する分析にくらべ、こうした情動的側面に関する分析は、従来必ずしも十分ではなかった。それは、情動的な要素を記述する枠組みが十分でなかったからである。構文論上の位置付けや品詞論としての議論はあっても、感動詞の具体的な用法の分析については、応答に関するものなどを除き、管見の限りほとんどないというのが現状である。[3] そこで、

本稿では、認知論的な観点を援用しつつ、感動詞の意味・用法を分析してみたいと思う。これによって、話し手の主観的な「情動」の言語的側面をいささかなりとも明らかにできればと思う。

二　感動詞の分類

まず考察対象の範囲の検討から始めたい。感動詞は、一つの単語の中に、文としてのさまざまな意味を未分化に内包しているのであるが、その内実は必ずしも均質なものではない。特に「辞」的側面と一口に言っても、話し手の情動的側面が中心になっているものと伝達的側面が中心になっているものとでは、自ずと性質に違いが出てくることになる。そこで、感動詞のそれぞれについて、中心的な機能によって、次のように整理をしておきたいと思う。

(1)　対他的でない
　情動的感動詞：わあ、おお、まあ、げっ、ああ、
　掛け声：よっこらしょっと、どっこいしょ
対他的
　挨拶・呼びかけ：おはよう、よっ、ねえ、おおい、
　応答詞：はい、へえ、いいえ、
　いい淀み感動詞：あああ、ええ、ううん

まず、その意味の中心が対他的な発話であるかどうかという点で、感動詞は二つに大別できる。この簡単な判別基準は、一人で発話できるかどうかという点である。一人でも発話できるものは、伝達的側面が意味の中心なのではなく、情動的側面が意味の中心になっていると言える。まず、

(2)　情動的感動詞：わあ、おお、まあ、げっ、ああ、おや、あれ、えっ

は、感情、注意など、内的な情動を未分化なまま発するものである。未分化ながらもそれぞれの使い分けはあり、逆に、情動の根本的なあり方を探る手掛かりになっているとも言える。これについては後で詳しく検討したい。また、

(3)　掛け声：よっこらしょ、うんとこしょ、どっこいしょっとのような「掛け声」も、広い意味ではある種の情動を表すものと言えるが、とりわけ、何らかの動作を伴う上で異質であり、一応の区別ができる。

一方、他者に対する伝達機能をもつものは、原則として一人で発話して不自然になるものだと言える。具体的には、先行発話に対する機能の違いによって三つに分けられる。

(4)　応答詞：先行文への態度表明：はい、いいえ、そう、ええ
(5)　挨拶・呼びかけ：コミュニケーションの関係設定：おはよう、よっ、ねえ、おおい、おい、なあ、
(6)　いい淀み感動詞：発話の時間稼ぎ：あああ、ええ、ううん

まず、相手の先行発話に対する態度表明を中心に表すものが「応答的感動詞（以下、応答詞と略称）」である。談話進行上のやりとりの標識と言える。これに対して、相手の先行発話に対する積極的な態度表明ではなく、主に対人関係の維持、コミュニケーションチャンネルの設定などの機能が中心になっているものが、「呼びかけ・挨拶」である（ただし、「挨拶」は相手の挨拶にたいする応答として使われることも多い）。さらに、中間的なものとして、応答でもなく、呼びかけでもなく、ためらいを表すなど、発話の間もたせの機能だけをもつものもある。これが「いい淀み」である。「いい

淀み」はいわば時間稼ぎの形式であって、文頭で一種の呼びかけ的な機能をもつこともあれば、まだ発話の続行を示す機能をもつこともある。いずれも、基本的には対他的な環境で使用されるのが普通だと言える（ただし「ええっと」のような思考中の表示は対自的）。

もっとも、この二類五種の分類は、典型的な用法による大まかなクラスわけでしかない。本来さまざまな意味を未分化に内包する感動詞において、その用法を一義的に決めることは極めて難しいからである。ただ、かといって、考察を加えるに当たって感動詞として従来一くくりにされたところを整理しないわけにもいかない。そこで、予備作業として、ひととおりの分類をしておくということである。従って、用法上は、さまざまな広がりがある。例えば、

(7) あれ蓋が閉まらない。（ごそごそやって）うん、これでいい。

のように、応答詞でも掛け声的に独り言の環境で使うことがあるし、

(8) A「僕はいやです。」B「あれ！そんなこと言わないでよ」

のように、情動的感動詞でも対他的環境で使えば、驚きの表示という一種の応答的用法をもつことができる。感動詞が表すある種の反応は、伝達現場ではやはり重要な言語記号になるからである。

三　情動的感動詞

三―一　方法論上の検討

感動詞の中でも、応答詞は談話運用上の標識として、かなり注目されてきており、研究も進んできている。その点、研究の必要性がありながらもっとも研究が遅れているのは、情動的感動詞の意味用法をめぐる問題である。以下、特に、こうした情動的な意味について考えてみる。この研究が意味論の研究の中でも特に遅れていることの理由には、三つのことがある。一つは分析上のモデルがなかったという問題である。「わあ」であれ「おお」であれ、他の形式との共起関係から意味用法をシンタクティックに規定することはほんど不可能なのであって、「感動」「驚嘆」「感嘆」といった用語を与える以上の分析は、確かに難しいと言える。二つ目には、発話状況と言語形式との相関が、必ずしも絶対的な規則性でとらえきれないという問題が考えられる。どういうときに「わあ」と言い、どういうときに「おお」と言うのか、などという問題は、文法的な規則に従うわけではない。極端に言えば「より自然かより自然でないか」といういわばファジーな問題なのである。三つめには、バリエーションの問題がある。つまり、方言差や男女差、年齢差などの問題も当然深く関与してくるのであって、分析の基準をどこに置くかは難しいと言える。

そこで、ここでは、次のような観点からの分析をしてみたいと思う。まず、情動のモデルというべきものをたてて、整理の枠組みを作るということである。そして、「どういう状況において典型的に使われ、また使われないか」を分析することを考える。その場合、まず典型的な用法に着目するということが必要であろう。未分化な形式である以上、用法上の広がりを最初から仮定しておく必要があるからである。そして、最後に、バリエーションの問題であるが、分析の足掛かりとして、ここでは、基本的には共通語での最大公約数的な部分を中心に考えることにしておきたい。もちろん、男女差を中心に、適宜年齢差、地域差などについても触れられる範囲で考えてみたいとは思うが、本格的な変異研究は別の機会に譲る。

三―二　モデル

感情と情動のありようを、大きく、「泉」にたとえるモデルを考える。内部から感情が「沸き上がる」こともあれば、外部からものが飛び込んで「心に波紋を広げる」こともあるという点に注目したいからである。事実、情動を表すいくつかの表現には、そういったメタフォリカルなとらえ方が共通して見られる。なお、後者の場合でも、泉に物が投げ込まれた時の最初の水面とのコンタクトの段階と、物が水底に達して泥などがもわっと沸き上がるという段階とがあるが、これと同じように、情意的な反応にも段階があるように思われる。もちろん、外部環境からの刺激自体にもさまざまな種類が考えられる。

そこで、情動的感動詞を、内的な情意がいわば「湧いて出る」タイプのものと、何かの状況に遭遇してそれが直接的なきっかけとなって急激な情意的変動がおこるものとに大別する。前者を「内発系」、後者を「遭遇系」と呼ぶ。前者は内部での感情状態の表示、後者は、外部環境からの刺激に対する一定のコード化された反応、を表すものとまず言える。

四　内発系

まず、内発系からみてみる。例えば、

(8)　うす曇りして北風の吹きすさぶ朝であった。眼をさますとすぐ、まだ床の中に横になったままで麦原さんの女房が言った。

「ああ！いつまンでも此処さ居られたらえかべなあ。」（そう）

という場合の「ああ」は、何らかの事態に遭遇した急激な情動的変化を表わすわけではない。心の内から比較的ゆっくりと沸き上がってくる感情だというべきであろう。

従って、「ああ」は、典型的な用法で考える以上、

(9)　「ああ、熱い」

のように、感覚をめぐって使う場合でも、例えば、熱い缶コーヒーを手にして暫く我慢していたような、いったん状況を受け入れた場合に使うことができ、その点で、遭遇系の「あっ、あつっ！」のような反射的な感動詞とは違っているように思われる。そこで、出現箇所も、感想・詠嘆的ニュアンスを強く出す場合には、

(10)　いい気持ちだなあ、ああ、

のように、文末に位置することもないわけではない。このように「ああ」という感動詞は、新たな事態との遭遇における急激な反射的反応とは違って、（たとえ何らかの事態との遭遇をそれ以前に経験していたにせよ）内的な情意の動きとして、一定の時間をもって発せられるものだということができる。付言ながら、こうした内発系の感動詞の意味は、「なあ」のような終助詞の、自己確認的とでも仮になづける用法に対応するところがあるように思われる（ただし、「なあ」自体は、新事態に遭遇した後の感想的な反応も表すことができ、遭遇系の感動詞にももちろん共起できる）。

ほかに、

(11)　うーん、痛い。

の「うーん」ようなものも、突然激痛がはしったというよりもがまんしていて耐え切れなくなったような文脈の方が適切である（例えばクギを踏んだりした場合には、典型的には、「あ、痛い。」のよう

になるのであって、「ううん」「あああ」のように伸ばしては言わない。逆に言えば、「ううん、痛い」のように言うのは、持続的な頭痛や腹痛の場合が典型的ではないだろうか)。何かに感動して言葉を失ったような場合の「うーん(ううむ)」なども、同様に、内から沸き上がってくる情動が強く、具体的表現を失っている状態だと言える。これは、いい淀みとしての「うーん」にも連続するところである。

以上、内から沸き上がる感情・感覚の状況を未分化に表す、内発系の感動詞を見たが、形式的にも、これらには共通するところがある。というのは、音韻的に、

(12) ああ、ううん、ああああ、

など二モーラ以上の拍数をもつという点である。一モーラの感動詞に内発的な意味のものはないのではないだろうか。これは、通常の内発的な感情感覚が、一定の時間的な幅をもっているということとおそらく無関係ではない。この議論が正しければ、イコニシティの議論としても興味深いところであろう。(4)

五　遭遇系感動詞

五―一　遭遇系感動詞

遭遇系は、情意変動が何かと遭遇して急激に起こることを表す。遭遇系は、そういう意味で刺激に対する言語主体の反応を表すと言える。遭遇系としてまとめたものでも、少なくとも二つの系列がある。

(13) あれ?うわあ!何だこれは。

の「あれ」ように、一次系として最初に未知なものと遭遇した反応が起こり、続いて、「うわあ」のように、二次系としてそれに対する情動的反応が起こるという順序が考えられる。

五―二　未知遭遇

まず、一次系について遭遇する状況の質による違いから検討してみたい。最初に考えるのは、新情報や新しい事態との遭遇の標識である。我々は事態の展開に対してある程度の予想なり見込みをもっているが、それから外れる事態や情報と遭遇した場合に、まず予想外、未知であったという反応を示すことが最初に行われると言える。これらは、意識が未知の事態や情報に向けられたという反応の表示である。具体的には、

(14) あ、あれ、あら、おや、え

などがあるが、これらを「未知遭遇」の感動詞と呼ぶこととしたい。前述のように、順序的には未知遭遇のものは初めにくる。例えば、

(15) 「お父さんの俳句ですよ。ちくわの穴に蠅止まるっていう。お父さんたらこれを載せるって言うんですよ。活字にするって言うんですよ。」「おや、まあ」(高円寺)

では、応答反応のまず最初に「おや」が位置し、予想していなかったということをまず表示することになっている。そして、それによって同定された事態に対して、あとの「まあ」という情意変動の反応が起こるのである。未知との遭遇という反応は、いわば泉の水面にものが投げ込まれたときの水面の波立ちにたとえられるような第一次の遭遇反応である。

これらは、遭遇した事態ないし情報を疑うというスタンスでも使え、文脈さえ合えば、

(16) あれ?／おや?／あ?／え?

のように、上昇イントネーションで使うことができる。上昇イントネーションで使われた場合は、まさに未知の事態や情報に対する探索というニュアンスを表すのであって、もっとも未分化な疑問文だと言うことができる。

ただし、「あ」は、新情報、新しい事態を受け入れる方向でのもっとも未分化な遭遇反応として使われる。

(17) 由布子「じゃあね、フルーツは半ぶんこね、あとはなにがいい?」

香織「あ、うれしい、じゃ、ハム下さい。」

由布子「ハムね、……あ!でも、飯み物ないんだ……」

(桜)

の最初の「あ」は、相手の「フルーツは半ぶんこね」という情報に新たに遭遇したことを表し、応答詞に連続するが、あとの「あ、でも、飯み物ないんだ」は、いわば「思い出し」である。ここでの新情報というべきものはまだ活性化されていなかった記憶である。このように、「あ」は、想起によって未活性の情報に遭遇した場合でも使える。もちろん、遭遇するものが大変な異常事態であっても、

(18) (夜中目を覚ますと家が火事になっている。)「あ!大変だ」

のように、「あ」を使うことができる。「あ」は驚き、つまり未知の事態との遭遇に対する反応として最も未分化な形式だと言える。

これに対して、

(19) あら、あれれ　おや、え

なども未知、予想外のものに対する遭遇として使うことができるが、想起した場合には使えない。先の例を「おや」に入れ替えて、

(17)′ 香織「あ、うれしい、じゃ、ハム下さい。」

由布子「ハムね……おや!でも、飯み物ないんだ」

と言えば、直接経験的に自分が「飯み物がない」という状況を発見したような意味になってしまうからである。ここから、「あら、あれ、おや」は、未知の具体的な状況に遭遇して、事情を理解しようといわば計算しているサインだと言うことができる。特に、「あらあら」、「おやおや」のような畳語形になれば、ことさら事情の飯み込みの計算に時間がかかっていることを表すと言える。そこで、緊急事態に接した時に、「あら、あれ、おや」などと発すれば、まだ事態が飯み込めていないことになる。また、その場合に、「あらあら、おやおや」などを使うとかなり暢気な印象を与えることになる。

(20) (夜中目を覚ますと家が火事になっている。)「??あらあら!／??おやおや!」

本来的には、「あれ」ではア系の指示詞が含まれているが、心的距離が遠いものという反応を表すのであり、そこから、自分の領域として事態を捕らえられていないことの表示として使われると言える(金水・田窪1990)。

また、「え」は、事態の存在や情報の受信そのものを疑う。従って、事態や情報の成立、存在そのものを疑うようなニュアンスが強い。それで、聞き返すような場合、

(21) A「君が全財産を預けてたあの銀行、業務停止だよ。」

B「*あれ?／え?　本当。」

のように、「え」の方が一般的である。例えば、先の例で、「え」を使って、

(17)″ 由布子「じゃあね、フルーツは半ぶんこね、あとはなにが

いい?」

香織「え、うれしい、じゃ、ハム下さい。」

と言えば、そのまま相手の言ったことを受け入れるというニュアンスではなく、本当にそう言ったかどうか少し疑ったようなニュアンスが出てくるように思われる。こうしたことは応答の問題とも深く関連している。

五―三　手続き遂行時のハプニング

未知の事態との遭遇という点で上述の未知遭遇感動詞とも重なるのであるが、話し手の予想していた事態の推移（仮にスクリプトと呼ぶ）からの逸脱をより積極的に表すものがある。具体的には、つまづいて倒れそうになった場合の「おっと」のようなものであるが、典型的には、何らかの手続きの実行中に予想外の事態が発生したことを積極的に表示すると言える。例えば、ちょっとつまずいた場合など、具体的な動作・手続きの実行中において予想外の事故が発生した場合には、「あ、」のように、未知遭遇系の感動詞も使えるが、「おっと」は予想からの逸脱をより積極的に表す。そして、「おっと」の場合それが修復可能な制御範囲内であるということを表すようであり、重大なニュアンスはあまりない。

この「おっと」は疑問として上昇イントネーションで使うことができないのであり、何だかわからないというスタンスをとっているわけではない。事態があきらかに予想とは違う推移の仕方をしているということを積極的に示すというのはこのためである。

ただし、事態といっても、話し手にとっての事態でない場合もありうる。野球を観戦していて、外野手がボールを落とす場面で「おっと！」という場合のように、自分が対象に感情移入して使う場合もある。例えば、

(22)　リカ「フラれちまった悲しみを、破れたハートを、エネルギーにして働くんだ」
永尾、手を止める。「おっと、力尽きたか、永尾完治！」（東京）

という場合も同様であろう。観察者が観察対象の視点にシフトしたモードで、事態の推移を計算し、予想外のハプニングの発生を「おっと」で表示しているのである。

用法的には、遭遇した事態が意外なものであるということだけを表示する場合もある。例えば、

(23)　リカ「ねね、コーヒーいれてきたから」
永尾「いま仕事してっから（とちょっとムッとしてる）」
リカ「おっと、他の女から電話があったら飛んで行くクセに、彼女の誘いは無視するか、この男、優しいフリして心は悪魔です。」（東京）

という例では、相手の返答について、意外であることを表すのであるが、相手の反応も含めて話し手のスクリプトを構成しており、予想したスクリプトからの逸脱を表示していると考えてよい。

語構成的には、「お」と「っと」に一応分解できるが、「掛け声」系の感動詞である、

(24)　よいしょっと、どっこらしょっと

と同じように、「っと」が含まれている。[5] これらの掛け声に共通するのは主体が何らかの動作の実行中であるということである。つまり、「と」は、動作の様態修飾としての形式であり、「さっと」の

「っと」などと本来同じものとして扱うことができるように思われる。ただ「おっと」では「お」が一音節だけであり、意味的に分解しにくい。それで、特に、手続き実行中のハプニングを表す場合、さらに「っと」がついて「おっとっと」という形もできると思われる。この場合、

(25) おっとっと、こけそうになった。

というように、他の「っと」系の感動詞と同様、発話者自身の動作の実行中におけるハプニングの発生という意味に限定される。付言ながら、事態修復への努力が続いているということの表示として、「っとっと」を続けて言う場合も考えられる。

ちなみに、いい淀みを表す「ええっと」もそういう意味では、内的な情報検索ないし、計算の実行中であるということの表示だと言えるかもしれない。なお、あえて前述の「え」と関連づけるならば、事態の心的な把握が十分にできていないということをもととして、その心的な把握作業進行上の手続き実行中という注釈として位置付けることができるかもしれない。もっとも、こうした語構成的な分析は今後さらに検討が必要である。

五―四　情意変動そのものの表示

五―四―一　一定の水準を越えたもの

次に、二次系として、遭遇による情意変動そのものの大きさを表すものについて見てみたい。泉に何かが投げ込まれ、その結果底から泥などが水中に浮遊して広がって行くように、これらは遭遇反応として情意的な変動が起こってくることを表す。これには男女差なども大きい。まず、情動要因の刺激としての強いこと、あるいは反応の度合いが極めて高いことを表す感動詞がある。例えば驚く場合など、平静さを保てないほどの情動の強さならば、

(26) うわあ、わあ、うわっ

などが使われる。[6] 具体的には、

(27) 美紀、良明の手からホースを奪い、良明の顔に水を掛ける。良明「うわっ！よせ、よしなさいって」（宇宙）

のように、物理的な状況や、

(28) 君子「好きにしたらいいがね。ネエ、朝ごはんどうする？」
良明「うわーっ、そのセリフ久しぶりにきいたなァ」
君子「何喜んでるの。どうするの？もし出掛けるんなら用意しないけど」（宇宙）

のように、相手の言った情報に遭遇して驚くなど、これらは一定以上の強い情意的変動があったということを示すと言える。逆に、町で友人とたまたま出会った時などは、それほど強い情意的変動があるとは解釈されないのであって、

(29) ＊うわあ、君か。（おお、君か。）

と言うと不自然である。

典型的な女性像としての印象をもたせる場合には、「うわあ、わあ」などの代りに「まあ」が使われることがある。ただし、情動の幅が大きいにしても特に強烈な場合には使われないようである（後述）。例えば、味見をしてみる場合でも、

(30) まあ、おいしい、
(31) わあ、おいしい！
(32) きゃあ、おいしい！

のように、後のほうが強烈な反応を表すという序列がありそうに思われる。このうち、情動の幅が相対的に低い「まあ」は、

(33) 「なおったら行けばいい、」
「まあ！あたしが帰ることをあんなに制めていたのに」
(乗合)

のように、相手の発言に接して驚いたような意味でも使える。相手から聞いた情報に遭遇した場合でも使えるのである。

これに対して、情動がさらに強い「きゃあ」は、単に情動が強いだけというよりも、遭遇が「直接経験的な事態」でなければならない。例えば、人の話を聞いていて、

(34) A「先日、同僚が五人も交通事故に遭ってね」
B「わあ、それは大変。」

ということはできるが、

(35) A「先日、同僚が五人も交通事故に遭ってね」
B＊「きゃあ、それは大変。」

のように言うことは一般的ではない。「きゃあ」は、情動が一定レベルを越えていることを示すが、その情意変動の原因が直接経験しつつある事態であるという特性をもつと言える。これだけの例をもっていうのは危険であるが、相対的に情意変動の幅がおおきいことを表すものは、遭遇するものが直接経験的な事態であり、情意変動の幅が比較的小さいものは、遭遇するものが情報内容であってもかまわないという傾向があると言えるかもしれない。

なお、直接経験の中でも、特に、何らかの危険な状況との遭遇の場合には、有声化して「ぎゃあ」となる。例えば、あこがれの歌手と出会ったとき、

(36) 「きゃあ、◇◇さーん」

のように言うことはあるが、

(37) 「ぎゃあ、◇◇さーん」

のように言うことは考えられない。このように遭遇系においては「遭遇」そのもののありようが問題になると言える。

Rレイコフ(1975)のような一種のステレオタイプ化には批判も強いが、大きく男女差という観点から見れば、女性において、特に強い情意変動を表すものが多様に分化していると言っていいかもしれない。もしそうだとすれば、日本語の社会文化的なある種の規範にも関連して、女性の方が感情的な起伏を豊かに表現仕分けることが期待されていると言えなくもない。ただし、これだけの例をもって断定するのは不適切であり、ここでは、語彙的な分析の傾向として指摘するにとどめておく。

五―四―二　平静を保った驚き

一方、これらの場合に対して、情動が強くても、平静さを保てる範囲内であれば、男性では、

(38) おお、おっ、ほう、

などが使われる。このうち、「おお」「おっ」は驚き、「ほう」は意外であるということの表示と言ってよい。例えば、

(39) 遂に肩まですっぽりと藁で包んでしまった。ちょうど藁から生えた人形のような恰好である。「おお、暖かい。暖かです。」とドナイフは藁を崩さぬように静かに首を婆さんの方へ廻した。(とり)

という状況では、その場で遭遇した「暖かい」という状況に対して、

一応の平静な反応をしていると言える。もしここで「うわあ」を使えば、情動が一定以上急激であるというニュアンスになる。ただし、「おお」の使い方には人によるバリエーションも大きいと考えられる。一定以上の反応を「おお」で表す場合もないわけではないだろう（あるいは英語の“oh”の影響などもないとは言えない）。

では、平静さを保てる範囲内の情動変化を表せる、女性らしい表現は何かといえば、それは「まあ」であろう。ただし、「まあ」は

(40) 交通事故を目撃して、「まあ大変！」

というように、平静さを保てない場合でも使うことができるのであった。しかし、比較的平静さを保てる場合でも使われている。例えば、

(41) 「ママ、それからポオルは、あたしの靴の裏に、クギを一杯打ちつけたのよ、駆けっこがうまく出来るようにって……」「まあ、どのお靴？」（乗合）

では、男性ならばさしずめ「ほう」などと言うところであろう。

六　応答感動詞の情動的感動用法

応答詞は情動的感動詞と相互に交渉する。まず、感動詞が応答的に使われた場合、

(42) A「君、今度当番だよ。
B「うわあ／えっ／あら、大変だ」

のように、未知の情報との遭遇を表す点で、「驚き」の表示として、相手の発話が新情報であるということを示すことになる（この点については森山(1989)に述べたのでここでは触れない）。

逆に、応答詞が情動的な反応を表す場合も考えられる。例えば、

(43) うん、おいしい。

では、刺激に対する一種の応答として（しかも満足を表すと言ってよい）「うん」という応答詞が情動的反応の表示として使われている。

少しメカニズムが違うものとして、「いや」のような応答詞も情動の変動を表す。この場合、聞き手が存在するのが普通のようであり、その点では、基本的に応答的な意味があると言える。そもそも、「いや」は、単に否定的応答を表すだけではなく、

(44) 永尾「（さとみを気にしながら向かい側にすわり）……」
松下「いや、風の噂で聞いたんだけどさ」
盛田「関口、三上と付き合ってるってホントか」（東京）

における発話の切り出しのように、文脈的不連続に対する何らかの標識としても使える。これと関連して、例えば、

(43) 「ううむ」私は不覚にもうなり声を立てた。彼は平然たる様子で「いや、実に、似たとはおろか、瓜を二つに、割らずそのまま……」（ひょっとこ）

のように、それまでの認識との均質な連続性を保証しないといった文脈的不連続の表示が、ある種の驚きを表すことにもなる。同様に、

(44) いやあ、うまい。

のような例も、情動の変動が大きく、本来不連続だけれどもついつい発してしまうといった意味である。その点で、内発系としても遭遇系としても使うことができる。いずれも、着目の度合いが高いということであり、属性を強調するような効果をもつと思われる。

なお、付言ながら、情動的感動詞と応答詞のこうした相互交渉の在り方は、品詞的な範疇として「感動詞」という範疇を立てておく

ことの根拠の一つとなると言える。

七　おわりに

以上、感動詞を大きく分類し、その中で、特に情動的感動詞の意味用法を、「泉」のメタフォリカルな比喩を使いながら、状況との関わりに着目しつつ分析してみた。その中で、まず、内発系の情動と遭遇系の情動とを分類した。

内発系の情動的感動詞は、心の内から比較的ゆっくりと沸き上がってくる感情を表し、「なあ」のような終助詞の用法と対応があること、「ああ」「うーん」というように、二モーラ以上の拍数をもつのが普通だということなどを観察した。例えば、「ううん、おいしい」、という場合、急激な情意の変動ではなく、内からそういう感情が沸き起こってくるということを表すと言える。

遭遇系の情動的感動詞は、情意変動が何かと遭遇して急激に起こすことを表す。そして、未知なものと遭遇した第一次の反応を表す系列と、それに引き続いておこる情動的反応を表す系列とにさらに二分することができる。これは「あれ、まあ」のように、感動詞の共起順序によって確かめることができる。

前者のうち、「あれ、おや」などの未知遭遇類は、遭遇した事態、予想外、未知であったという反応を表す。上昇イントネーションで使われて、未知の事態や情報に対する探索を表すこともある。未知の事態に遭遇して、事情を理解しようといわば計算しているサインであり、処理に時間がかかっていることを表す場合に「あれあれ」のように言うこともある。遭遇したものが新情報であってもよい「あ」や応答詞と関連が深い「え」などもこの類に位置付けることができる。

また、「おっと」のように、予想外表示と言えるタイプもあった。事態の予想外の推移（ただし制御可能）に遭遇しているということを示すものである。これと関連して、形態的には、「っと」は何らかの動きの遂行に関連していることなども述べた。

遭遇による情意変動を表す類では、その反応の大きさが問題になる。すなわち、平静さを保てないほどの情動の強さを表す「うわあ」などの類と、一定の範囲以内であることをいう「おお」とが分類される。女性の場合には、どちらにも対応するものとして「まあ」があると言える。ただし、女性の直接経験した場合の強い反応として「きゃあ」など、男女差も見られるのであった。

こうした感動詞の使い分けは、いわば最も無意識に近いところであり、日常ほとんど意識されることはないように思われるが、それなりに情報のプロセスの仕方に対応した特性をもっており、通常、我々はかなり厳密に使い分けているように思われる。その中でも、予想からの逸脱、未知の事態との遭遇といった場面での心的処理が情意の変動を考える上で非常に重要な要素となっていると言える。

以上述べて来たのは、現代日本語の分析の枠組みであるが、これをもととして、今後、方言などのバリエーションに関する分析や、他言語や古典語などとの対照研究を進めていくことも必要であろう。

注

（1）従来の議論としては、まず、感動詞が、構文論的に独立成分なのか並列成分なのか修飾成分なのかといった議論がある。構文論としてこうした独立性の高い形式をどう扱うかということが、理論上問題になるのである。また、感動詞の分類についても議論がある。比

較的新しいところでは、感情的なもの、呼びかけ的なもの、応答的なものというような三分類がなされている（梅原1978、石神1981など）。

（2）感動詞が独立的だと言っても、付加表現が伴う場合も多い。例えば、「いいえ、違います。」の「違います」は実質的概念を表す動詞だが、応答上の付加表現として慣習的に使われており、その意味で一種の標識となっていると言える（付加表現については森山1993などを参照）。

（3）定延・田窪（1995）は、音声対話において話し手自身が行っている心的操作をモニターする標識として、「ええっと」「あのー」を分析し、前者が「検索や計算などのための予備的な心的操作」に入っていることを表すのに対して、後者が「言語編集という、聞き手の存在を予定する心的操作を行っている」際に用いられる、といった分析をしている。感動詞そのものの意味と機能をモデル論的に分析する点で画期的だと言える。ただし、ここで述べるような情意的な感動詞の分析はない。

（4）金水（1994）は、終助詞「ね」の談話管理上の機能と音声的特徴の相関に着目し、データ内容の「二値的」（確認的な機能の場合）か「量的」（共通経験や自己確認といった機能の場合）で情意的側面が問題になる）かの違いが持続の有無に相関するとしている。また、同論文は、「あ」「ああ」のような感動詞の違いもこの違いに相関するという可能性を示唆しているが、内発的な情動は二値的ではないという点で本稿の主張と重なるところがある（ただし、遭遇系の場合、持続によって情意が表されることがあると言えるが、根本にあるのは、本稿で述べるように、各々の感動詞固有の意味である）。

（5）「っと」には独り言であるということを表すような機能もある。森山（1990）参照のこと。

（6）「ああ」でも、LHというイントネーションで言う場合には、一定水準以上の遭遇反応を表す。因みに、HLHというイントネーションの場合、悪いこととの遭遇を表す。これらは比較的平板なイントネーションの内発系の「ああ」とは違うものである。

【参考文献】

石神照雄（1981）「感動詞について」『信州大学教養部紀要』一五―一

梅原恭則（1978）「感動詞小考」『文学論藻（東洋大学）』五三

北沢　尚（1988）「感動詞とは何だろうか」『東横国文学』二〇

北原保雄（1976）「陳述副詞と接続詞と感動詞と―その構文論的位置付けについて―」『文学語学』七四

金水　敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3　日本認知科学会

金水　敏（1994）「知識モデルに基づく感動詞、終助詞、応答詞類の包括的研究」科研費報告書『音声・言語・概念の統合的処理による対話の理解と生成に関する研究』

定延利之・田窪行則（1995）『談話における心的操作モニター機構』『言語研究』一〇八

田窪行則（1994）「音声対話の言語学的モデル　談話管理標識としての感動詞の分析」『音声言語情報処理』一―三

宮地　裕（1998）『新版文論』明治書院

森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1

（1990）「意志のモダリティをめぐって」同2

（1993）「否定の応答付加表現をめぐって」『日本語教育』81

山口堯二（1984）「感動詞・間投詞・応答詞」『研究資料日本文法4』（鈴木一彦・林巨樹編）明治書院

レイコフ　Lakoff R.（1975）『言語と性』"Language and Woman's Place"（れいのるず訳一九八五）有信堂

〔出典〕

宇宙：『宇宙の法則』旭井寧・井筒和幸（映人社『九〇年鑑シナリオ集』）

桜：『桜の園』じんのひろあき（同）

東京：『東京ラブストーリー』柴門ふみ（TV版シナリオ集　小学館）

そう：『蒼氓』石川達三（文芸春秋社『芥川賞全集』）

乗合：『乗合馬』中里恒子（同）

――京都教育大学助教授――